教育学研究科（修士課程）特別支援教育専攻　コーディネーター専修，課題研究

大学院生の教育実践力を育てるための課題研究のあり方

特別支援教育講座　　長尾秀夫

１．授業の概要

課題研究は教育学研究科大学院生にとって、修了のために取得しなければならない必須単位である。授業担当教員は１人である。そして、受講大学院生は２名である。

授業の目的は、地域の高等学校で個別的支援の必要な生徒の支援を行う。そして、教科担任と連携して生徒を支援する方法を明らかにする。

到達目標は、１）特別な支援を必要としている生徒の実態を知る。２）特別な支援が必要な生徒、その他の学級の生徒、学級担任の支援をすることができる。３）生徒や教員とかかわり、コーディネーターとしての専門性を習得する。

関連するディプロマ・ポリシー（DP）は、①教育活動に取り組むため，高い技能と豊かな表現力を身につけている。(技能・表現)②自己の学習課題を明確にし，理論と実践を結びつけた主体的な学習ができる。(関心・意欲）である。

２．授業方法

１）研究に関する希望を具体的にする。２）教育支援の具体的なまとめ方をガイダンスする。３ー１４）実習校での生徒、教員の支援についてレポートを作成して毎週報告し、その理解と具体的な支援方法を話し合う。同時に先行研究を調べ、生徒と自分にあった支援の工夫を企画する。１５）前期の成果をまとめてレポートする。１６）後期の実習について具体的な目標を確認する。１７ー２９）実習校での生徒、教員の支援を継続する。３０）講座の修士論文発表会で口演し、討議する。

３．アンケート結果

(1) ディプロマ・ポリシーに関連して

DP１の知識・理解について、１Aの知識の習得では十分貢献 1/2、貢献 1/2、１Bの専門的知識が十分貢献 1/2、貢献 1/2 であった。DP2 の思考・判断について、２Aの課題の理解では貢献 2/2、２Bの対応策の習得が十分貢献 1/2、貢献 1/2 であった。DP3 の技能・表現について、３Aの技能の習得が十分貢献 1/2、貢献 1/2、３Bの表現力の習得が十分貢献 1/2、貢献 1/2 であった。DP4 の関心・意欲について、４Aの学習課題の明確化が十分貢献 1/2、貢献 1/2、４Bの主体的な学習意欲が十分貢献 2/2 であった。DP5 の態度について、５Aの責任感の形成が十分貢献 2/2、５Bの対人関係力の育成が十分貢献 1/2、貢献 1/2 であった。

（２）授業の特性上追加した質問について

１）教員として自分の研究が役に立ったこと？対象生徒に対する理解が、生徒のできないことから、得意なこと・好きなことに転換した。授業の目標設定が生徒の実態に合ったものとなり、確実な成果につながった。担任教員と協力して支援を行うことで、相手の立場に配慮することを体験した。

２）毎週のカンファレンス（本授業）が役立ったこと？生徒の見方について担当生徒を基に話し合いから学ぶことができた。自分で考えた支援の工夫が興味深い試みであることを自覚し、研究に自信を持って取り組むことができた。研究の方向に迷いが生じたとき、一緒に考えて具体的な絞り込みをすることができた。

３）今後の授業で必要なものは？具体的支援の実践例を授業の中で紹介する。そして、全国の実践例の情報交換をして、ネットワークを構築する。

４．総括

この授業の受講大学院生２人は現職教員であった。実習校が義務教育の学校であったので、遠隔地の生徒を対象に実践研究を行った。おかげで、自分だけで支援をするのでなく、担任と共に、コーディネートが重要な意味をもってきた。その中でＰＤＣＡサイクルを展開し、授業ではＣＡを具体的に行うことで、立派な成果を挙げることができた。実践力を育てる教育として、ＰＤＣＡサイクルの重要性、カンファレンスで具体的なＣＡを紡ぎ出す意義が明らかとなった。